

## 「神の栄光のために」

ヨハネによる福音書 7:1-18

イエスさまが、主として活動されたのは、ガリラヤ湖を中心とする「ガリラヤ地方」でした。当時のユダヤの中心地は、神殿のあるエルサレムです。地図で見るとわかりますように、エルサレムから見ると、ガリラヤは、ずっと北にある辺境の地です。イエスさまが育たれたナザレという村もこのガリラヤ地方にあり、そこにはイエスの兄弟たちが住んでいました。マルコ福音書(6:3)によると、イエスさまには、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン、という名の弟たちと、姉妹たちが一緒に住んでいたように記されています。イエスさまは、この郷里の地を愛され、ガリラヤ湖の周辺を中心に、神の国の福音を述べ伝えられました。ヨハネ福音書によると、イエスさまは3度エルサレムに上って、そこでも活動されたことが記されています。そして、その3度のエルサレム行きは、3度ともユダヤの祭りに合わせての上京となっております。ユダヤには三大祭りというのがあって、過越祭、七週祭(五旬祭)、仮庵祭と呼ばれています。いずれも昔は農業と関りのある祭りであったようですが、ユダヤ人たちは、モーセ時代の出エジプトの出来事と結びつけて、自分たちの先祖が、神によって選ばれ、奴隷の地から解放されたことを記念して、神殿に感謝の献げものを献げる習慣になっていました。

今日のヨハネ福音書の7章は、イエスさまの3度目の、最後のエルサレム行きに際しての兄弟たちとのやり取りと、エルサレムでのユダヤ人たちとの論争を記した記事です。時は、「仮庵祭」が近づいた丁度今頃の季節です。この「仮庵祭」という祭りは、ユダヤの三大祭りの中で最大の祭りであって、各地から大勢のユダヤ人たちがエルサレムの神殿に集まるのです。この祭りは、元々オリーブやぶどう、いちじくなどの秋の収穫祝う祭りであったようですが、後に、エジプトの奴隷の地から解放されたユダヤ人たちが、荒野での40年のさすらいの旅を続けた際、木の枝葉で仮小屋を造って寝泊まりしたことになんで、家の屋上や野外に仮小屋を造って1週間そこで寝泊まりをして、当時の苦勞を偲び、神に感謝する時を過ごしたのです。当時の人々は、このことを通して、人生は旅であり、この世は「仮の住まい」であることを心に刻んだようです。

イエスさまにとってこの仮庵祭にエルサレムに行くということは、まさに地上の仮庵を離れて、天にある永遠の故郷、神の都への新たな旅立ちを意味していたようです。

この「仮庵祭」が近づいたある日のこと、イエスの兄弟たちがイエスさまにこう語ったというのです。3節「ここを去って、ユダヤに行き、あなたのしている業を弟子たちに見せてやりなさい。公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい」。

この「弟子たち」とは、この前の6章68節に記されていた12弟子以外の、イエスに従っていた人々でしょう。彼らはイエスが「天から降って来たパンである」と言い、「このパンを食べる者は永遠に生きる」と言われた言葉につまずき、イエスを離れ、もはや共に歩まなくなった人たちです。イエスの兄弟たちは、そのことを気にかけて言ったのかもしれませんが。「祭りに、エルサレムに行って、大勢の人々の前で、力ある業を行い、みんなをあっと言わせてみたらどうですか。そうしたら、あなたを離れて行った弟子たちも、きっと戻ってくるでしょう。また、さらに多くの人があなたを崇めるようになるでしょう。こんな所でくすぶっていないで、都に出て、自分の力をはっきりこの世に示したらどうですか」と。

しかし、イエスさまは、その兄弟たちの提案に対して、「わたしの時はまだ来ていません」と言って、その誘いを退けたのです。「わたしの時はまだ来ていない」。この言葉の意図は、「わたしには、このガリラヤで、まだしなければならない使命がある」ということであつたと思います。エルサレムには、イエスに敵対し、命を狙っているユダヤ人たち(祭司長・長老・律法学者たち)がいました。いずれイエスさまは、エルサレムで彼らによって苦しめられ、十字架に引き渡されることを覚悟されていましたが、まだその時ではない、と言われたのです。イエスさまが予測していたその「わたしの時」は、それから7か月後の「過越祭」であつたのです。イエスさまは、過越祭で犠牲として献げられる羊のように、「神の小羊」として、人々のために命を献げることを自覚しておられたのです。「わたしの時はまだ来ていない」。これが、兄弟たちの誘いを断つた第一の理由だと思えますが、この誘いを断つたもう一つの理由は、イエスさまにとって、エルサレムに行くということは、兄弟たちが言うような、多くの人々の前で大きな業を行って、自分の栄光を現わすたではなかつたからです。

イエスさまにとって、兄弟たちの誘いは、かつて荒野で体験したあのサタンの誘惑を思い起させるものではなかつたでしょうか。あの荒野で最初に出会ったサタンの誘惑は、「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうか」というパンの誘惑でしたが、マタイ福音書によると、2番目のサタンの誘惑は、イエスを聖なる都(エルサレム)に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、「神の子なら、飛び降りたらどうだ。神は天使に命じて、あなたの足が石に打ち当たることがないように、手で支えてくれるだろう」というものでした。これは、神の子なら、人々をあっと驚くような大きな業を行って、人々の心をつかんだらどうだという誘惑です。それに対してイエスさまは「あなたの神である主を試してはならない」というみ言葉をもって、その誘惑を退けたのです(マタイ 4:5-7)。イエスさまは、自分の兄弟たちの好意に満ちた提案の中に、あの時と同じサタンの試みを感じたのではないのでしょうか。

「サタンは、天使の姿をとって現れることがある」と言われます。親しい者の親切な言葉が、わたしたちにとって思わぬ誘惑になることがあるのです。

その身内の兄弟たちの言葉に、イエスさまは6節でこう答えました。「わたしの時はまだ来ていない。しかし、あなた方の時はいつも備えられている。世はあなたがたを憎むことはないが、わたしを憎んでいる。わたしが、世の行っている業は悪いと証しているからだ」。イエスさまにとって「わたしの時」は、神さまから定められた時であり、神の子として十字架を負う時でした。しかし、神の支配する「時」と関わりなく、毎日を自分の好き勝手に生きている者は、この世の者として、世から憎まれることもないのです。イエスさまはこう述べて、「あなた方は祭りにのぼっていくがよい。わたしはこの祭りには上って行かない」と言われたのです。

家族とか近親者は、私たちににとって大切な存在であり、普段はよき理解者ですが、しかし信仰の問題になりますと、相手がクリスチャンでない場合、なかなか自分の立場を理解してもらえない場合があります。例えばコロナ禍の中で、自分は教会へ行きたいと思っても、家族が感染を心配して、認めてくれない場合があります。また教会のために、もっと奉仕したい、献金したいと思っても、家族の反対や周囲の人々の手前、自分の思うようにできないという場合もあるでしょう。歳をとると共に、自分の立場が弱くなって、子どもたちや家族の愛が、制約になることもあるのです。しかし、そういえ中で、何を大事にするか、ということがいつも問われることになるのです。

私が金沢の教会におりました頃、教会の長老からこんな話を聞いたことがあります。「この教会の以前の会堂には、すべての窓に金網が張ってあり、玄関には、風呂桶を置くための棚が据えられていた。「真宗王国」と呼ばれるこの地では、キリスト教に対する反発が激しくて、窓によく石を投げつけられた。風呂桶の棚は、教会に行くことを家族に禁止されたり、咎められたりした教会員が、銭湯に行くと言って風呂桶を持って礼拝に来て、帰りにさっと近くの銭湯につかって帰るために設けられていた」と。

戦前のクリスチャンたちは、そのような様々な無理解からくる制約の中で、色々と工夫しながら必死に礼拝を守ったことを知らされ、心が熱くなる思いがしました。

「わたしには、わたしの時がある」。イエスさまは、こう言って兄弟たちの誘いを断ったのです。信仰者は、そういう家族の意見や誘いまた反対の中で、賢く自分の「時」を見極め、神さまとの関係の中で、主体的に決断し行動することが求められているのです。このようにして、イエスさまは一人「ガリラヤにとどまられた」(9節)のです。

ところが、10節を見ると、「しかし、兄弟たちが祭りに上って行ったとき、イエス御自身も、人目を避け、隠れるようにして上って行かれた」と記されています。これは見方によっては、「なあんだ、格好いいことを言いながら、結局兄弟たちの誘いのにつ

たじゃないか！」と思われるかも知れません。私も最初そのような感じを抱いたことがあります。よく、政治家たちは、選挙の時になると良さそうなことを公約として言うけれども、実際には国民のことよりも、自分の利益や派閥の力に流されて、公約を守らず、欺かれたような思いになることがあります。しかし、ここでのイエスさまの変更は、そのようなものではありません。イエスさまは、ここできっぱりと身内の兄弟たちの誘いを断り、エルサレムで自分の業を誇示して、自分の名を挙げることを拒絶し、あくまでも神の子としての「自分の時」に従って、エルサレム行きを決断したのです。たとえエルサレムにおいて多くの苦難を経験することがあっても、その地において、十字架の死の前に、悪しき力と闘い、最後の証しをしなければならないと思ったのです。私はこのヨハネ福音書7章の9節と10節の間には、イエスさまの深い祈りがあったと思います。おそらくその祈りの中で、「わたしは自分の時に備えて、今こそ踏み出す時だ」と示されたものと思います。

私たちには、変えるべきことと、変えてはならないこととがあるのです。変えるべき時には、勇気をもって変える決断が必要だと思えます。それが神さまから示される「時」だと思えます。ラインホルド・ニーバーの祈りとしてこのような言葉があります。

「神よ、変えることの出来るものについて、それを変えるだけの勇気を我らに与えたまえ。変えることの出来ないものについては、それを受け入れるだけの冷静さをあたえたまえ。そして、変えることの出来るものと、変えることの出来ないものとの、識別する知恵をあたえたまえ。」

問題は、その「変えるべきもの」と「変えてはならないもの」との区別を何によって判断するか、ということです。その「知恵」はござかしい人間の知恵や自分勝手な都合ではありません。神さまのみ心であり、それを知ることは、祈りによるほかないのです。

イエスさまは18節でこう言われました。「自分勝手に話す者は、自分の栄光を求め。しかし、自分をお遣わしになった方の栄光を求める者は真実な人であり、その人に不義はない」。イエスさまにとっての関心事は、人のうわさや評価ではなく、神の前に真実に生き、神の義を貫くことによって「神の栄光を現わす」ことだったのです。

私たちは、常に「自分の栄光」を求めて、人の評価や周りの人の意見に左右されがちですが、今、私たちが求むべきことは、神さまから与えられている「自分の時」を大切にして、「神の栄光」を現わすことではないかと思えます。ジュネーヴで宗教改革を行ったジャン・カルヴァンは、「ただ、神の栄光のために」という言葉を合言葉にして、市の改革にその生涯を捧げたと言います。私たちも主に従って、それぞれの十字架を背負って、主に従い「神の栄光のために」祈り励む者でありたいと願います。アーメン